

DRAMA かながわ 別冊 6号



神奈川県演劇連盟合同公演

『藪原検校』 作:井上ひさし / 演出:濱田重行

2016年12月9～11日 神奈川県立青少年センター ホール 文:劇団やぶさか 飯塚春香

幕 開き、視覚の迫りに驚きました。大舞台の縦横いっぱいにはひろがる無機質な足場。そこに何本ものカラフルな紐が下がっていて、無機質なものとカラフルな温かみのある紐の不思議なバランスにぐっと心をつかまれました。そしてまずなんといってもこの作品、3時間という大作において出演者の皆さんの膨大なセリフ量とそれを聞かせる役者力に脱帽でした。語り部と主人公杉の市のセリフ量はとんでもなかったのではないかと思います。観ている間はそれを忘れてしまうくらい惹き込まれて観ることができました。

主人公の杉の市は「大悪党」なのですが、そもそも盲目というだけで社会の敵とされているような時代に、彼は「生きる」ことに執着した人間味あふれる人物であり、共感こそ得られないとしても『この人はこの先どうなっちゃうんだろう』と目が離せなくなってしまう求心力の持ち主でした。

1幕での10分を超えるのではないかと思います。語りの内容も節回しもとても面白く、圧巻の名シーンでした！「才能」と「大悪党」両極端な面を持ち、盲目という重たい運命の中、どんなことにも負けずに上を上を目指していくその「強さ」はダークヒーローの

カッコよさがありました。あまりの大悪党っぷりなので絶対に自分達の近くにはいて欲しくない人であるのは間違いないのですが、そこはワンクッション「語り部」の存在が観客と舞台の間に入ることで、数々の大罪も、おかしな言い方ですがずいぶんと印象がやわらかくなっていくように感じます。「語り部」という役が冒頭以外は衣装も現代風になり、あくまで現代の観客側の立ち位置から物語を進め、説明をしてくれている安心感、感じのいい語り口もあって、その語り部の人と対話しながら物語を聞かせてもらっているような面白い感覚でした。

また、この作品に欠かせない味となっていたのがコントラバスとギターによる生演奏と役者の歌だと思います。時代物とギターの生演奏というのは意外な組み合わせでしたが、なかなか合うんだなあという新しい発見でした！生演奏というのはそれだけでもパワーがあるのでともすれば音楽とお芝居がケンカしてしまう場合もあると思いますが、今回はバランスが取れていて、一部効果音の部分も生演奏で担うというのはとても面白かったです。

最後の処刑の場面は客席ゾーンも巻き込んだ大掛かりな仕掛けと、繰り返される印象的なメロディで、大悪党の最期にふさわしいとてもとても強烈なラストシーンでした。

まりこ☆みゅーじあむ

「おはなしころころ」

構成・脚色・演出：川井真理子

2016年8月27日 於：横浜にぎわい座のげシャール

8月27日11時開演の公演を観劇させて頂きました。私は今回始めてまりこ☆みゅーじあむの公演を見ました。「結構自由な会ですので楽しんでってください」という開演のおことばのとおり約1時間30分の間楽しませてもらいました。観客は勿論親子を主体にしておじいさん（私の場合）、おばあさんでうめつくされていました。私の幼少のころの娯楽は紙芝居しかありませんでしたが、今の子供たちはこうして歌や、おもしろいお話し、遊びを運んでくれるお兄さんやお姉さん達がいてうらやましく思いました。



最初の15分くらいの間は、変身トンネル「大砲→包帯、竹→ケタ、タケシ→シータケ」・お口の体操「そうだ村の村長さん」にんじんBAKUDAN「にんじんを投げる」などの楽しいお遊びと歌がありました。その次からおはなし「さるのにぎりめし裁判（量りが主役）・猫の踊り場（横浜の民話・みずもと屋のトラという猫の手ぬぐい踊りが面白い）・く間で大人のための工作タイム（私は新聞ネジリをやった）・たのきゅう（秋田の民話・狸のたのきゅうとウワバミ（大蛇）の化かし合いが面白い）・まんまる魔女のばけものづかい（おそうじ→せんたく→たたむのリズミカルなお話しと、からかさのお化け、のっぺらぼう、大入道、六六首、化け猫、まんまるねこなどのつくりもののお化けが面白い）がありました。最後には「おはなしころころの歌」をみんなで歌いました。いろいろ小道具大道具がたくさん出てきて楽しかったです。遊び心はこうして小さいころから養われ、やがてその心が生きることを大切に思う気持ちにつながっていくのではないのでしょうか。

劇団蒼い群 村田次郎

劇団やぶさか

「Hazy Lazy Moonlit Night」

作・演出：海老原あい

2016年10月21日～23日 於：さくらWORKS

演劇ファンの眩きを二言三言。初の劇団やぶさか観劇である。初めて訪れた「さくらWORKS」は、関内駅から徒歩5分程の年季の入ったビルの1フロアに設えられた多目的スペース。運営するまちづくり系NPOサイトには集会やシンポジウム、ライブ、演劇等の催しに活用、と

の説明があった。入場すると、ロビー的なスペースから奥まった舞台エリアへと斜めに繋がった格好で、ロビーに近い（壁のない）側に座席が3列ほど、出ハケ用の空きを挟んでL字に組まれている。凡そ30席位だろうか。細工しづらそうな舞台空間には中央に大木の幹を据え、そこから万国旗風に八方にロープを渡して「飾り込み」に工夫が施されており、一方照明・音はなかなか使いづらい印象だった。



口はばったい事を書かせて頂ければ、15年を超える劇団やぶさかの過去公演はホーム劇場を持たず転々としている。名の通った相鉄本多、プラザソル等から、STスポット、BankARTスタジオ、チャイハネB1といったユニークな小屋を渡り歩き、同じ会場を三度以上は使っていないようだ。新たな「場所」との出会いに渴えるさすらい気質でもあるのか？と勝手な想像をして親近感を催すが、今回の公演がその「旅」のどんな局面になるのか、筆者には判断材料がないので評は控える。

ただ、「劇団」本体の輪郭は幾分か見えた。丸々ファンタジーな脚本、踊りあり、歌も少しあり、メンバーは女性のみ、結成以来自前の美術・衣裳・振付…総合すれば、一朝一夕では醸されない固有の風味と、デザイン的な統一感があった。古今東西（特に古）の寓話の潤色を得意とするようだがオリジナルもあり、今回は過去の二作品を下敷きに発展させた物語。うす曇りの朧月の夜、ハロウィンの森を舞台に複数のグループが行き会ったり錯綜し、最後には兄弟再会の大団円となる。ダークキャラの闇を残しつつ、終局のカタルシスが「やぶさか」流に作られていると感じた。

ただし…以下は感言。「森」の簡素な装置での場転は人物の登退場、テンポのいい進行は悪くないが、劇団も過去エピソードも知らない者には人物名と関係がしっかり把握できない。衣裳の類似も影響。また女優達の堂々とした風情と元気なキャラは滲み出ていたが、小ギャグを挟んだ台詞は物語説明（伏線配置）に止まって勿体なく、多様な人間的感情の発露を物語中盤でももう一歩、みせてほしい…初期メンバー健在の息長い劇団なれば尚、俳優への観客の自然な願望に思うが如何。 京浜協同劇団 河村はじめ

劇団こゆるぎ座

「闇に咲く花」

作：井上ひさし 演出：楠田正宏

2016年10月22日・23日 於：小田原市民会館大ホール

座 席の上手側にせり出している鳥居の通路は稲荷神社ならではの演出を感じました。緞帳が開き、まず目に入ったのは天井まで突き抜ける程に高くそびえ立つ神木。そして天井から長い鈴紐で吊らされた神鈴。どちらも高い

天井ならではの圧巻な装置となっていました。

ステージ全体は二面構造。上手に本殿、下手にはお面工場の部屋（それとギターを奏でるスペース）。



間口18m×奥行16mとかなり広いステージにセットされた装置は、実に圧巻でした。その中で繰り広げられる演技は自ずと立体的になるため、とても見ごたえを感じました。

私はかなり後方の座席から観たので、果たして全ての台詞を聞き取ることが出来るのかと当初は思ったのですが、それは無用の心配でした。座席数が1000を超える大きな会場で、役者の皆様はどうしてあんなに通る声を出せるだろうか。演出上、客席に背を向けて台詞を言うシーンが多々あったのですが、そのような場面の時こそ声の出し方を強く意識されているなど感じました。

演目は一幕三景・二幕三景の全六景構成。第二次世界大戦が終戦してから2年が経過した昭和22年。東京都千代田区にある「愛敬稲荷神社」が舞台となります。

時代の流れに泣かされながら、常に善人を演じるしかなかった宮司の牛木公麿。純粋過ぎる程に強い正義感のため、悲しき運命を背負うことを自ら選んだ、公麿の息子：健太郎。持ち前の明るい性格で、誰かのために動くことを惜しまない、健太郎の友人：稲垣善治。戦争で夫を亡くすも、神社に併設されたお面工場で働きながら強く逞しく生きる5人の女性。

果たして戦争とはなんだったのだろうか。国は「戦犯」を作り出すことによって、過ちを正当化しようとする。戦争は終わってからも苦しみが続く。そんな中で、人々は心に何を抱いて生きていけばよいのか。そんなことを考えさせられる作品でした。

この作品には「ギター弾き」という役があるのも魅力のひとつでした。奇しくも私も舞台上でギターを弾く役を演じる機会があったため、「あんな風に魅せる演奏をしたい」と思いながら、きれいなメロディーに聞き惚れていました。

休憩を挟んで約2時間半、笑いあり感動ありで最後まで楽しく観劇することが出来ました。素晴らしい作品に出会えたことに感謝致します。ありがとうございました。

劇団やぶさか 池田 宏治

ガムシャニズム

「英雄学園」

作・演出 須藤旭 2016年11月10日～13日

於：神奈川県立青少年センター 多目的プラザ

まずこの文章をお読みになる方に明言しておく。筆者はスタッフとして運営を行っていたので多少の身内最良な表現が含まれてしまう可能性をどうかご容赦願いたい。

劇場に足を踏み入れるといつもと客席が逆位置に設計されている。そのまま視線を舞台上に移すと大きな白い布が天井から吊るされている。それは細かく縦に裂かれ、人が動いた時にその風でゆらゆらと揺れていた。それ以外に目立った装置はなく、どのような空間使いをするのか期待が膨らむ。



いざ物語が始まると、舞台後方からの光により先ほどの白い布にキャストを浮かび上がらせる。裂けた布から飛び出してくるキャスト達は舞台を縦横無尽に駆け回り、圧巻のアクトだった。

ストーリーはかなり分かりやすい。欲望に忠実な人間、染まってしまう人間、それに打ち勝とうとする人間など、ヒーロー物にお馴染みのキャラクター展開が多いのだが、それでも客の期待を裏切らないし熱量をあげさせてくれる。

殺陣が見所の一つとなっている作品だが、キャストイングの際から殺陣だけは妥協したくないと主宰が言っていたそうで言葉を裏切らないパフォーマンスだったと思う。音ずれが気になるシーンが多々あったがキャストの熱量の前にそのずれは些細なものであった。

今年の9月には続編なのだろうか、ショートオムニバスストーリーを公演するとのことなのでこの文章でガムシャニズムに興味を持って下さった方や、ヒーロー物や殺陣好き、熱くなりたい方は是非9月の続編公演を観劇することをお奨めしたい。

虹の素 熊手竜久馬

劇団かに座

「流星に献げる」

作：山田太一 演出：馬場秀彦・益田敏雄

2016年11月13日～15日 於：関内ホール・小ホール

山田太一作品にはほのぼのとしたものが多い。『流星に捧げる』も同様であり、その雰囲気は劇団かに座の持つ何かゆったりとして暖かな雰囲気にうまくマッチしていたと思う。



舞台は古い洋館の居間。住人は毛利という車椅子生活の老人と、彼を長年世話をしている家政婦の時子。そこに、井原という経営者、元保険外交員、フリーターなどが突如訪れてくる。老人がネットに書き込んだ「動かない風見鶏、車椅子の老人、ひとり」という三つのキーワードを目印に訪ねてきたのだ。時子は胡散臭い彼らを追い払おうとするが、ボケ始めている毛利は彼らを受け入れ、その中の

何人かは洋館に住みついてしまう。逆に、追い払おうとした時子は二十八年間尽くしてきたにもかかわらず出入り禁止となってしまう。

車椅子のボケ老人と同居人達の生活が始まり、老人を利用しようとする彼らの下心も明らかになってくる。また、老人は愛人の存在がきっかけで妻に去られ、息子を交通事故死させ、自らも車椅子生活となり、それが原因で心を閉ざしているらしい。動かない風見鶏はその象徴である。

ボケを否定しつつも徐々に混乱を深める老人。ついには同居人達を別れた妻、死んだ息子、愛人などと混同してしまう。同居人達は当初、無理解で距離を置いた対応をとっていたが徐々に別れた妻を演じ、愛人のふりをし、死んだはずの息子となって彼に接するようになっていく。老人の手を握り、優しく抱きしめはじめたのだ。そして老人は感極まり、人生を賛美するかのようになり立ち上がる。

山田太一は「痴呆」という誰もが直面する問題をテーマに、「孤独」「ネット社会」「フリーター」「介護」「詐欺」「PTSD」「不倫」などの世相を反映させ、生きるということへの何らかの光を見出そうとしている。従い、クライマックスは、これらの問題解決への「一縷の希望」が提示され幕が降ろされる“はず”と思っていた。がしかし、劇団かに座の演出では、老人が車椅子から立ち上がった時、舞台背景として投影されたのは「動かない風見鶏の静止画像」だけであった。

老人や居候たちの気持の変化の象徴として“「動かない風見鶏」がゆっくり回り始める”。これが原作の「オチ」である。風見鶏がピクとも動かないのでは希望の光は見えてこないだろう。演出家の意図がわからない。この点、違和感と失望が残った。

出演者では井原役の小林一雄が老人への気持ちの変化をうまく演じており、老人役の馬場秀彦は抑えた演技で好演していた。また、時子役を演じた金谷陽子が、散漫、平板になりがちな舞台をまとめようとしていたのが印象的であった。若い座員も多いようで、これからも田辺前代表が築き上げてきた劇団かに座の良き伝統に一層の磨きをかけていてもらいたいと思う。

劇団よこはま壱座 平岡龍

劇団蒼い群

「朝は、7時」

作:ポール・オズボーン 訳:青井陽治 演出:福本幸雄

2016年11月12日・13日 於:横須賀市立青少年会館ホール

休 憩無しの2時間、4姉妹を中心に、そのパートナーと家族達の物語。舞台上・両端には2軒の家が建っており、中央は両家共通の庭の様になっている。そこで熟年夫婦2人と同年代の女性1人が「マートルの結婚」について話をしている所から物語は始まる。だがこのマートル、何処の誰だかが分からない。出てくる名前全員が外国人だったせいもあって中々話に入って行けない。その為か、

暫くの間興味の対象が俳優自身に行ってしまったんだと思う。ちょっとしたギクシャク感やセリフの危うさは、舞台初日の致し方無い所か。

蒼い群は創立45周年、

60回の歴史有る劇団だ。それだけ年数を重ねると、物理的にハードルが上がってしまう部分があるかも知れない。だがそこは、何とか頑張ってもらい、豊富な経験と45年続けて来た情熱をフルで活用してもらえたら嬉しく思う。しかし、その印象は物語が進み、出演者が全員登場した後で大きく変わって来る。それぞれの状況が絶妙なバランスで絡み合い、しっかり書かれている人間関係が、観る側の興味を捉え始める。

元大学教授の亭主の言動に威圧感を感じ、顔色を伺ってしまう長女。夫と2人でのんびり暮らしたいが、未だ独身の妹を突き放せず、同居を許してしまっている次女。自信の持てない男達(旦那と息子)の面倒を見る事から離れられず、それが自分の居場所になってしまっている三女。姉の夫への想いを断ち切れず、彼の近くに居る事から動けなくなってしまった四女。そこへ三女の息子・マートルが12年待たせていた「婚約者」を連れて来る事で、今まで均衡を保って来たバランスが微妙に変化する。そして、思いもよらなかった人たちの感情の蓋を開け、長い間心の奥に仕舞って来た想いを浮かび上がらせて行く。次々に起こって行く距離感の変化は、観ていてとてもワクワク出来た。

スタートして暫く感じていた「俳優と物語の隙間」もいつの間にか馴染んでいた。程良く力の抜けた俳優の演技が、物語の中に入り込ませてくれたと思う。ただ立っているだけで存在しているその居方は、観ていてとてもじっくり来ている様に思えた。積み重ねて来たからこそ出来る演技と、きちんとした構造を持った台本のコラボレーションがまた観られたら素敵だと思いました。

余談:終演後出演者に聞いた話だが、本来4~5時間有る台本を2時間に削ったらしい。始めの30分が苦しかったので、導入部分にもう少し工夫があれば嬉しかったかも知れない。

studio salt 東享司

虹の素

「失恋博物館」作:熊手竜久馬、桜木想香 演出:熊手竜久馬
2016年11月30日~12月4日

於:神奈川県立青少年センター 多目的プラザ

青 少年センターの多目的プラザで虹の素の『失恋博物館』を観てきました。博物館がコンセプトという事ですが、会場の作りがユニークで面白い。円形舞台のように中央に演技スペースになりそうな構造物があるものの、客席がない!無造作に置かれた段差や椅子など好きなとこ



ろから見るというスタンス。観劇回は混雑していたため、床に座って見ている人もおりました。

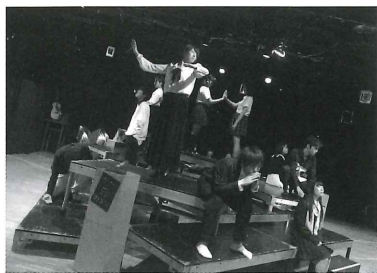
作品は上演回により、7つの短編のうち6つを上演。それらを、日替わりの館長がストーリーテラーとして紹介していく構成。全部の作品を観てみたいと思うけど、複数回観に来ないと全部は観れないという歯痒さ。ただ、2回観に来て5つの短編は同じ物が上演されるスケジュールなので、リピーターがどの位いたのか気になるところです。

失恋にちなんだものを飾る博物館というコンセプトなので、会場内には舞台面やそうでない端の方にも、実際に色んな物が飾られており、近くで見ることが出来る。それらの展示物のエピソードが語られるため、各エピソード毎に演技する位置や正面が変わり、その都度、始まる前に観やすい位置を案内してくれるので、お客さんがごそごそ移動していく様はちょっと面白い。作品の一部として思わずその様も観てしまう。

日替わりで館長役の役者が変わり、客席とコミュニケーションとりながら進めるところがあり、観劇中に舞台上の役者に話しかけられると自分はドキドキしてしまうのだが、客席が明確でない作りがここでも生きて、役者と観客との会話が舞台上での役者間とのセリフとスムーズに繋がりが違和感がなく良かった。もちろん、役者さんの力量もあったからだろう。

短編自体は基本的にちょっと切ないお話が揃っているのだけれど、お話毎に、世代が変わっていたり、人と人との関係性が変わったりで、飽きずに楽しめた。真ん中あたりで、男子2人でコントのように失恋を語るエピソードは、甘酸っぱさでお腹いっぱいになりそうなどの箸休めというか、虹の素でこういうテイストは珍しいけど、全体の構成としてよかったなと感じます。

劇団やぶさか 池田 宏治



いる劇団の12月公演の稽古が佳境に入ってきてはいたが、うまい具合に稽古前の時間を利用して観劇する事が出来た。どうしても観たい演目だったのだ。

今回は、上演時間が50分ほどの小作品が2つ。と言ってもその内容は濃く重く、それぞれが見応えのあるものであった。まずは岩手県の地域演劇の傑作と言われている「めくらぶんど」。舞台は雪国の古い農家の囲炉裏端。屋根を多めの白い布が覆い、雪を表現しているのが印象的である。見ているだけで寒さを感じてしまう。そしてこれが最後に効果的な使われ方をしている。

出演者は3人だけ。密造酒を造る老人(小川がこう)と取り締まりの役人(藤井康雄)、そして今回の私のお目当ての稲垣美恵子演ずる、戦死した息子の事が気になって成仏出来ない幽霊の婆さん。この3人が繰り広げる、暖かくて可笑しくて哀しくて切ないお話である。

とにかく3人の間がいい。そして何より、シニア世代の役者が演じるリアルさ。どんなにうまい若い役者が化けたって、こうはいかない。安心して最後まで観ていられる心地良さは、何物にも代え難い。

爺様は、屋根の雪下ろしを手伝ってくれる村人が来るのを待っているのだが、そこへ死んだはずの婆様がやって来る。勝手知ったる我が家を軽やかに動き回る様子が可笑しくも可愛らしく、2人の味わいある方言の掛け合いは、日本昔ばなしを聞いている様だ。息子の手紙を読むシーンはグッとくる。この夫婦に限った事ではない。日本が戦争をしていたちょっと昔。多くの人々がそういう教育のもと、受け入れざるを得なかった日本があったのだ。密造酒取り締まりの役人も巧妙だ。それを婆様の機転でうまく追い返し、婆様も息子の事を納得して、あの世に帰っていく。又1人になった爺様は、生きる気力がなくなったかの様に、もう雪下ろしはしなくていいよな、と呟く。そして、家が雪に押しつぶされてしまう衝撃のラスト。あの白い布が轟音とともに一気に落ちて暗転。圧巻だ。人生の最後、これでいいのか？演出に聞いてみたい。そして休憩なのだが、「見せる舞台転換」とでも言うのだろうか、転換も1つの舞台なのだ、と思える実に美しい転換を初めて見て感動してしまった。

次の「嬰兒殺し」は、貧しさ故に我が子に手をかけた女土方が、自ら許しを請いに巡査のもとにやってくる。同情しながらも、連行せざるを得ない巡査の葛藤。ベテランの安定した演技と、若手の一生懸命さが清々しい。巡査の娘役の所作は、演技指導の賜物と思われた。「無理してでも観に行ったら良かった！」と思えた2作品だった。

劇団よこはま壱座 優木かおる

京浜協同劇団

「めくらぶんど／嬰兒殺し」

めくらぶんど 作:川村光夫 演出:藤井康雄
嬰兒殺し 作:山本有三 演出:和田庸子

2016年12月2日～4日、12月9日～11日 於:スペース京浜

久しぶりに新川崎駅を降り、京浜協同劇団に向かった。数年前の合同公演。全リ演(全日本リアリズム演劇会議)の公演の稽古。何度通ったのだろうか。丁度所属して



演劇プロデュース『螺旋階段』

「僕がサンタに会えたなら」

作・演出:緑慎一郎

2016年12月3日・4日 於:小田原市民会館小ホール

壱 座の公演を間近に控えた2016年12月4日の日曜日、台本片手に東海道線に乗りこみ、螺旋の公演を見に行った。小田原市民会館小ホールは初めて入る小屋だったので少し迷ったが、無事到着。



まず目に入ってきたのは舞台の緞帳？とその前に広がる演技スペース。照明を吊るためのイントレで組まれた高い照明台。幕開き前にはほとんど飾りなんてない、質素な舞台であった。そして何より客席がフラット。客席に平台で若干高さを出した演技スペースは正直見辛さが懸念され、それは舞台が始まっても払拭できなかったのが残念だ。

とはいえ、芝居の中身、演出、舞台の使い方に関しては流石。芝居の最中緞帳がおもむろに上がっていくとそこには映画館の客席のセットが組まれている。ステージ前の演技エリアがスクリーンという見立てでストーリーが紡がれていき、客席を役者が駆けていく場面も。

今回は芝居では、螺旋階段のメンバーに加え、客演のみなさんがいい味を出している。脚本／演出の緑慎一郎が好きであろう遊びも散りばめられている。特別ゲスト枠は螺旋階段創立10周年というところでの余興なのだと思うが、どうしても芝居から心が離れる印象を受けた。もう少し本編に馴染めなかったのか、いや、敢えての違和感なのか…

ともあれ、劇団が10年続くということはなかなかすごいことだと思う。(神奈川は老舗ももちろん多いのだが)初めて出会った頃の螺旋階段からずいぶんと色々なものが力強く、洗練されてきていると感じたが、水野の滑舌のように変わらないものももちろんある。それらをひっくるめて、螺旋階段が歩んだ10年を感じ目頭が熱くなった。ということにしておく。 劇団よこはま壱座 海老名信吾

劇団河童座

「わしゃ喰っちゃらん！」

作・演出：横田和弘 2016年12月10日・11日
於：横須賀市立青少年会館ホール

12月10日18時開演の公演を観劇させて頂きました。

23年前に初演されて以来現在まで、いくつかの手直しをされてきたと思われるこの作品の家族の



姿が、果して「出来過ぎの家族で理想に過ぎない(作者パンフでの言葉)」かどうかは、23年間多数の観客との間で交わされてきた大事な内容となっている。

「アルツハイマーの老人を抱えている家族の苦労は現実にはこんなものではない」との一方の意見が、素直に劇空間と劇時間を受け入れられない壁となって一部の観客の気持ちの内に存在するのも事実と思われる。私は上演の手法(演技や舞台美術、照明など)がどんなに上手でも下手であっても、演劇は単純明快であるべき結論を観客に提示すべきであり、又それが社会的責任を有する必要があると考えています。それには社会との「のりしろ」が必要ではないでしょうか。

今回観させて頂いた作品には「つらいことは、たくさんありますが、考え方ひとつで、随分楽になるに違いありません(作者パンフでの言葉)」という「のりしろ」があり、多くの観客とつながっていてとても素晴らしいことだと思います。

劇団蒼い群 村田次郎

神奈川県立青少年センター・演劇資料室を御利用下さい

演劇資料室では、外国や日本の戯曲をはじめ演劇雑誌等多くの演劇図書を取り揃えており、戯曲などの無料貸出もしています。御利用は一回3冊まで2週間借りられます。また神奈川県内のアマチュア劇団の活動記録等もごございますので大いに御活用下さい。演劇資料室で活動して頂くボランティアスタッフを募集しております。(週一回、任意の時間帯に参加いただけます。)

神奈川県立青少年センター 2階 演劇資料室 〒220-0044 横浜市西区紅葉ヶ丘9-1 ☎045-263-4472

神奈川県演劇連盟加盟団体(50音順)

- 演劇プロデュース『螺旋階段』●ガムシャニズム●京浜協同劇団●劇団蒼い群●劇団河童座●劇団かに座●劇団川崎演劇塾●劇団こゆるぎ座●劇団横濱にゅうくりあ●studio salt●劇団よこはま壱座●ナオサク企画●虹の素●まりこ☆みゆーじあむ●ミュージカルプロジェクトM.PinK●ヨコスカ・ベアフットシアター●横浜小劇場

神奈川県演劇連盟HP: <http://kenenren.org/>